

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「総研大レクチャー：2008
年度『科学映像の制作理論と制作』」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保, 正敏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4335

「総研大レクチャー：2008年度『科学映像の制作理論と制作』」

日 時：2008年9月1日－9月6日

場 所：長野市飯綱高原にて開催

このレクチャーでは、昨年度と同様に長野市飯綱高原の「ロッジ・ピノキオ」を基地として、6日間にわたり、科学映像の制作理論などの講義、および、撮影から編集・映像作品完成までが実施されました。参加者は、総研大の講師4名、外部講師4名、および総研大院生や外部からの聴講生14名、その他の参加者も含めて計25名でした。今回のレクチャーでは、講義と映像制作の二つの部分が織り交ぜられて進行しました。

講義では、映像民族学の大森康宏先生による映像制作理論を中心に、平田光司総研大学長補佐による科学と社会に関する問題、国立遺伝学研究所の池尾一穂先生による科学映像と図形言語化された説明モデルとの対比に関する問題、その他にも、映像を撮る側と見る側の相互理解とやらせの問題や、撮影・編集に関わる技術的・社会的環境に関する問題などが解説され、それに基づ



緑に囲まれたロッジ・ピノキオ



平田光司先生の「科学と社会」に関する講義

く議論が行われました。映像制作の部分では、飯綱高原在住の美術工芸家や研究者にインタビューし、自分の作りたい映像の骨子を固めてからあらためて撮影に臨む、という民族誌映像制作の基本を踏まえながら撮影した映像を、参加者全員に披露し議論しながら編集作業を行い、最終的には5分間の映像作品にまとめる、という流れで進められました。



撮影前のインタビュー

ことにより、対象者のどの面に迫ろうとするのか、それをどのように表現するのか、という点で、撮影する側の文化的背景や関心の差異を際立たせるという、興味深い結果が得られました。

編集作業は、それぞれが撮影した映像を互いに批評しながら進められたために、連日、明け方4時頃までかかるというハードなものでした。しかしその作業の中から、映像を編集・制作することとは、見る者に何を訴えたいのか、そのために最も効果的な技法は何かを考える創造作業であるにとどまらず、今回のように対象が人である場合には、その人の歴史や人生観をも浮かび上がらせ、またそれと同時に、撮る側が対象者に向ける眼差しも映し出し、ある意味では、映像制作者の内面を隠さずもえぐり出す、あるいは自らを表現する過程でもあることが実感できるものでした。

9月5日の夜に開かれた完成作品の上映会には、総研大の野村雅一理事・副学長も参加したほか、幾人かのインタビュー対象者や近隣の住人の方々も参加しました。

すなわち、この上映会は、撮る側、撮られる側、見る側の三者が一同に会する機会となり、映像の持つ意味をあらためて皆で議論する場となったわけです。映像を制作するうえで、この三者が場を共有することの重要性があらためて明らかになり、まことに意義深いものだったと思いま

インタビューの対象者としてお願いしたのは、木工制作者、バレー衣装制作者、トールペイント制作者、カッティングアート制作者、長野県環境保全研究所の生態研究者、気象研究者など7名の方々でしたが、参加者が多いので、同じ方に対して複数人がインタビュー、撮影することになりました。この方式をとる



事前のインタビューを踏まえて撮影する



延々と続く編集作業



編集作業は連日深夜におよぶ

す。参加者である総研大院生の専門分野も、文系から理系まで巾が広く、専門分野といういわば異文化を相互に理解する刺激的な場面にもなったことは、総研大事業の趣旨にも大いにかなうものでしょう。

こうした、三者が一同に会して議論する場の作り出されることが、本レクチャーの真骨頂だと思われま。私自身も、講師であると同時に映像制作の生徒の立場で参加したのですが、教える側、学ぶ側という関係を超え、お互いが学び合う場となったことも、特筆に値する点です。ハードなスケジュールをこなす中から、上記の様々な意義を体得した参加者の全員が、解散時に、「得るものの大きいすばらしい機会だった」と異口同音に語ったことを見ても、今後もこうした形式で本レクチャーが継続されることが望ましいと強く思うところです。



インタビューされた方々や野村雅一理事・副学長も参加した作品上映会

【文責：比較文化学専攻 教授 久保正敏】